

## オロカとオロソカ（その三）

我 妻 多 賀 子

形容動詞のオロカ（愚）とオロソカ（疎）の比較考察を行っているが、まずオロカに関しては、これまで二回にわたり、通時的な意味・用法を記してきた。△注1▽  
そこで、今号では、オロソカの方を取り上げ、その調査結果について詳しく述べてみることにしたい。  
以下、これまでの

- 一 はじめに
- 二 オロカの通時的考察（上代〜中古）
- 三 オロカの通時的考察（中世以降）

に続く形で述べて行くことにする。

### 四 オロソカの通時的考察（上代〜近世）

先にも述べたように、現代語で言うところ、オロカ（愚）もオロソカ（疎）も共によく使われる語である。

また、古語の方で見ると、オロカについては、これまで見て来たことから明らかなように、その使用例は非常に多かった。

すなわち、『今昔物語集』の百四十二例、『源氏物語』の百三十一例を始めとして、その他、『沙石集』六十九例、『狭衣物語』と『発心集』が五十七例、『夜半の寝覚』三十九例、『正法眼藏』三十五例、『宇津保物語』と『徒然草』が三十一例、『落窪物語』二十九例、『平

家物語」と『十訓抄』が二十八例と、時代・ジャンルに關係なくよく用いられていた。

右は個々の作品における用例数であるが、総じて見ても、私が参照にした上代から近世までの約六十ほどの作品中、オロソカの用例が出て来ないものはほとんどなかったし、量的にも各作品少ないと言つことはなく、総数も僅に千例を越えていた。

さてそれでは、このオロソカに対して、オロソカの古語における使用状況はどうであろうか。これが、全く意外なことに、きわめて、用例数が少ない。

例えば、オロソカの例が多かった『今昔物語集』ではオロソカは一例も使われていず、『源氏物語』ではたつたの九例という有様である。今回の調査の際も、私はオロソカの時と同じく、六十ほどの作品に当たつてみたのだが、オロソカは用例無しというものが続出し、全作品を合計した用例数が、なんと百例にも満たないのである。

よつて、この二語をその使用度数から比較すると、オロソカはオロソカよりも十倍ほども多く使われていることから、そこには雲泥の差が存することになる。

そこで、これほど用例数に大きな差異がある二つの語の比較をすること自体、躊躇されるのであるが、ともかく、とりあえずは、オロソカの通時的な用法をながめて

みることにしよう。

尚、言うまでもないことだが、総用例数が少ないので、オロソカについては、上代から近世まで時代を分けずに一括して意味別に見て行くことにする。

初めにオロソカの意味としてまず挙げたいのは、左に記す『日本靈異記』の例である。

○「若し輕み咲(わら)ふ者有らば、當(まさ)に世々に牙齒疎(オロソカ)ニ缺け、脣醜く鼻平み、手脚繚戻(モト)リテ眼目(め)角昧(スガメ)ニなるべし。」といふは……(上ノ十九)

この上巻第十九は、暮を打つ沙彌(さみ)が、折から来た法華經品を読むを著(ごちしや)を馬鹿にしたために、口がゆがんでどんな治療を施しても治らなかつたという話である。そのうち、右の部分は法華經の一文を引用しているところであるが、ここに出て来る「疎」の字に、興福寺本を見ると、「於呂曾可尔」という訓がついている。『日本靈異記』の中でも、興福寺本は善本として名高く、特にその訓釈は平安初期の國語資料としての価値があると言われる。△注2▽

そこに一字一首の万葉仮名でオロソカニと訓が施され

ているところから、この時代、形容動詞オロソカが存在していたことが明らかとなる。またその意味は、歯が欠けている状態をオロソカニと形容しているので、「透き間が多い」とか「まばらな」と訳すことが出来よう。

このように、歯を対象として形容動詞オロソカを用いた例は時代も下って中世に成った『足利本仮名書き法華經』の中にも二例見えている。

○かみ(髮) しろ(白) くしておもて(面) しは(皺)

みは(齒) をろそか(疎) にかたち(形) こかつ(枯渴) せるをみ(見) て・・・

(妙法蓮華經隨喜功德品第十八)

○まさによよ(世世) にけし(牙齒) をろそか(疎) にか(缺) け・・・

(妙法蓮華經普賢菩薩勸発品第二十八) へ注3V

その他、右のように「透き間が多い・まばらな」の訳が当てはまると思われる例は、ほんのわずかなので、以下すべて列挙してみることにする。

○若菜をおろそかなる籠に入れて・・・

(源氏物語・手習)

○春雲ガ合スルカトヲモヘハ又ヲロソカニナルソ。

(中華若木詩抄・上)

○合スルカトヲモヘハ疎ナル処テ陰晴未定也。

(中華若木詩抄・上) へ注4V

○秋ナレバ柳毛葉ガ疎ニシテサビサビトアリテ・・・

(中華若木詩抄・中)

右のうち、『源氏物語』の例は、籠を対象とし、その目が粗くて透き間が多い状態であることを、オロソカと表現している。

また、中世に出来た抄物の一つである『中華若木詩抄』のうち、初めの二例は「薄暮春雲合又疎」という漢詩の説明に出て来る文章で、春の雲がばらばらに分かれています。様子を動詞「合スル」と対照させて、形容動詞「ヲロソカニ」で言い表している。もう一つの『中華若木詩抄』の例は「岸柳葉疎野草秋」という漢詩について述べたところで、秋になって柳の葉が枯れて落ち、まばらになった様(さま)を描写している。

以上のオロソカは、歯・籠・雲・葉など、本来密な状態であるものが分かれて透き間が出来、ばらばらになった場合に使われるもので、例は少ないながら、時代的に

は長く見えている。そこでこの「透き間が多い・まばらな」と考えられるものを、オロソカの意味のIとしたたい。ところで、この種のオロソカは当然細やかさに欠けるため、ここから左のような意味が派生する。まず『日本書紀』の例から考察してみよう。

○「臣(やつかれ)既(すで)に不敏(をさな)し。當(まさ)に復(また)何をか言(まう)さむ。但し其の葬事(のちのわざ)は輕易(おろそか)なるを用ゐむ。  
(天智八年十月)

右の天智紀の例を見ると、熟語の「輕易」に対して、北野本でオロソカナルという訓がついている。この場合、葬に対してオロソカと用いているが、その意味は漢字の「輕」や「易」が表す通り、「簡素な」とか「粗末な」あるいは「みすばらしい」ということになる。薄葬は大化以来の方針だったということからも、その意味が納得出来る。△注5▽  
ところで、右のような「簡素な・粗末な・みすばらしい」の意味を示すオロソカも、先に挙げたIと同様、例がそれほど多くないので、まず初めにすべて時代順に掲げてみることにする。

○所のさま絵に書きたらむやうなるに竹編める垣しわたして石の階(はし)松の柱おろそかなるものから珍らかにをかし。  
(源氏物語・須磨)

○いとおろそかに軟障(せむじやう)ばかりを引きめぐらしてこの国に通ひける陰陽師めしてはらへせさせ給ふ。  
(源氏物語・須磨)

○御しつらひなどいとおろそかに事をきてさびしく物心ほそげにしめやかなれば・・・  
(源氏物語・幻)

○この翁例もかく宿る人を見ならひたりければおろそかなるしつらひなどして来たり。  
(源氏物語・手習)

○糧ともしければおろそかなる報をあまくす。  
(方丈記・四)

○又平治の逆乱にも親類をすてて参じたりしか共、恩賞これおろそか也き。  
(平家物語・巻四)

○わづかにおろそかなる白屋なり。  
(正法眼藏・行持上)

○香なく華なく坐褥おろそかなり。  
(正法眼藏・行持下)

○「おほやけの奉り物はおろそかなるをもてよしとす」

とこそ侍れ。

(徒然草・二段)

○倚廬(いろ)の御所のさまなど板敷をさげ葦の御簾をかけて布の帽額(もかう)あらあらしく御調度ともおろそかに・・・(徒然草・二十八段)  
○平治にもまた親類を捨てて参られたれども、恩賞わこれまたをろそかにあつた。

(天草本平家物語・巻二)

右の十一例のうち、七例までは設備や飾りつけ、調度などに対してオロソカと用いている。

すなわち、初めに『源氏物語』の四例を部分的に解釈すると、順に「石の階、松の柱は簡素ながら珍しいもので趣がある」「たいへん粗末に幕だけ張りめぐらして」「御部屋の飾りつけなども随分簡素に省略して」「簡略な設備などして」となり、いずれもこれに相当する。

また、『正法眼藏』の二例も「白屋」が「白茅でふいた家」、「坐褥」が「坐する時に敷く長方形の敷物」の意味なので、やはり設備・調度の類に含まれる。

そして又、言うまでもないことだが、『徒然草』二十八段の例は、そのものずばり「調度」に対して、オロソカであると述べている。

以上、設備・飾りつけ・調度などを対象にすると、オ

ロソカは「粗末な・簡素な」という解釈がびつたりする。『方丈記』の例は本文が不確かなところだが、「報」を「哺」ととり、「食糧が乏しいので、粗末な食物もおいしく食べられる」という解釈が一般に行われている。この通説に従えば、オロソカは「食物」に対して使われていることになる。

残った三例のうち『平家物語』と『天草本平家物語』の例は、同一個所に出て来るもので、「恩賞」を対象とし、それが粗末だったと言っている。また、『徒然草』二段の例は、「おほやけの奉り物」すなわち「天皇の御召し物」に対して、それは「粗末なのがよい」と兼好法師自らの意見を述べている。

以上、右に掲げた「簡素な、粗末な、みすばらしい」という訳の当てはまるものを、以後オロソカの意味のⅡとしたい。これらはその対象が右のように多種多様であり、また時代的に見ると、かなり長い間用い続けられていたことになる。

さて、これまで述べて来たオロソカのⅠおよびⅡは、ほとんどが具体的、物理的な内容のものについて用いられていた。ところが、その対象が変わると、おのずからオロソカの意味も違って来る。まず、人間を対象にした場合の例を、『竹取物語』でながめてみることにしよう。

○むめる子のやうにあれど、いと心恥つかしげにをろ  
そかなるやうに言ひければ、心のまゝにもえ責めず。  
(竹取物語・御門の求婚)

右は、御門がついにかぐや姫に求婚し、その使いが来  
ると決まった時の姫の気持ちを述べたところである。

通釈すると「(姫にとつてかぐや姫はいつも自分が)  
生んだ子のようにはあるが、(この時には)たいへんこ  
ちらが気恥ずかしいほどにそっけなく言うものだから、  
自分の思いのままに責められない」とでもなろうか。

つまりオロソカは、かぐや姫の御門に対する態度を述  
べていて、「そっけない」とか「冷淡な、よそよそしい」  
の意にとることが出来る。このように人と人との關係に  
ついて、親しい交わりが感じられない時に用いるものを  
オロソカの意味のⅢとしたい。

左に『竹取物語』以外の例をいくつか抜き出してみる  
ことにしよう。

○「汝(いまし)若し国神(くにつかみ)を以(も)  
て妻とせば吾(われ)猶(なほ)汝(いまし)を疏  
心有りと謂(おも)はむ。(日本書紀・神代下)

○ヲヤヲミチヒク子ノ心サシ今日争カオロソカナラム。  
(三宝絵詞・下)

○「かくめでたき子もたらん人をばいかゞはをろそか  
にはし給はん。(宇津保物語・くらびらきの中)

○「いつくにもいかで見給ふればをろそかなる御中ど  
もにも侍らざめり。(宇津保物語・国ゆづりの中)

○「いでやおろそかにもおはしますかな。  
(源氏物語・柏木)

○昔男有りけり。おのこ子二人持ちたるにとりて、兄  
はさきの妻の腹、弟は今の妻の腹になん有りける。  
かゝれど兄のおのこ、まゝ母の為に露もおろそかな  
らず。(発心集・第六ノ二)

○むかしのおとこよりもむまれけるちゝのことはをろ  
そかにおほゆることほりにまけて・・・  
(唐物語・二十三)

○そのごとく人としても今までした歎思ふ者にうとん  
じをろそかなる者に呢(むつ)ぶもたゞ此猿のたと  
へにことならず。  
(伊曾保物語・下)

○銀(かね)遣ふ客ををろそかにして不断隙(ひま)  
で暮すは・・・(好色一代女・巻一)

○其人をおろそかにせぬこそやさしけれ。  
(男色大鑑・巻八)

右に掲げた十例のうち、最初の『日本書紀』の場合、漢字の「疏」はウトキと訓むのが通説だが、山城向神社所蔵本ではオロソカナルの訓がつけられていた。つまり、オロソカが「疎(うと)い」と同義で用いられていることになり、明らかにⅢのグループに含まれる例となる。

その他の例もすべて人間同士の対処の仕方に形容動詞オロソカを用い、「そっけない、冷淡な、よそよそしい」の訳が当てはまるものばかりである。また、時代的に見ると、上代の『日本書紀』から始まって、中古、中世と続き、最後は近世初期の仮名草子の一つ『伊曾保物語』そして西鶴の著作になる『好色一代女』や『男色大鑑』にまで実に長期間にわたって使い続けられていることがわかる。

以上、Ⅲに属するオロソカは人と人との関係に用いられるものであるが、次に、その対象が形を伴わない精神的・抽象的なものになると、またここに新しいオロソカの意味が生じて来る。

実は、量的にはこの種のオロソカが最も多く出て来るのだが、初めに『平家物語』の左の例から検討してみることになろう。

○「又国家を折奉る事おろそかならず。」

(平家物語・巻二)

右は比叡山の前座主が「広く天台宗の教法や顕教・密教の二宗を学び、比叡山の興隆を念じて来た」と述べたあとに続く言葉で、「また国家の繁栄を祈り申し上げることもいい加減ではない」となる。つまりオロソカは、誠意に欠ける様子を表し「いい加減な、なおざりな、疎略な」と解釈することが出来る。以下、この種類のものをオロソカの意味のⅣとする。

ところで、この意味の場合、形式的に見ると、右に挙げた『平家物語』の例のように、下に打ち消しの語を伴うものが目につく。いくつかその例を掲げて見ることにしよう。

○「この事」ときえおかせ給はんことは一事として  
おろそかに軽め申し給ふべきに侍らねば・・・

(源氏物語・若菜上)

○心アラン人冥土ノ用意オロソカナルベカラズ。

(沙石集・巻七)

○それと光同塵の御垂跡何れ以て疎かならねど威光を四方に現し給ふはこれ八剣の神徳なり。

(謡曲・源太夫)

○これすなはち座敷の内の因果なり。かへすがへす疎かに思ふべからず。

(風姿花伝)

○年来申し承つてのちはいささかもをろそかにわ存せなんだれども・・・

(天草本平家物語・巻三)

○義経ほいないことに思わせられてをろそかに思い奉らぬ由を起請文を書いて進せられたれども・・・

(天草本平家物語・巻四)

○其身美道の意気をおろそかには思はぬ故ぞかし。

(男色大鑑・巻六)

○道のおろそかならざる所、門人としてわすれまじき所也。

(三冊子)

○凡兆には一句僅に十七字、一字もおろそかに置べからず。

(去来抄)

○寄所感心、一句躰(てい)疎(おろそか)ならず。

(秋の夜評語)

○一向(ひたすら)世のめぐみと明暮れをろそかならず。

(曾根崎心中・巻三)

○(不思議の撞鐘を)おろそかにつくべからず。

(博多小女郎波枕)

右に挙げた十二例は、いずれも、下に何らかの形で、

打ち消しの語を伴い、「疎略に軽んじなざるはずはございません」と断定したり(源氏物語)、「なおざりにしてはいけない」と戒めたり(沙石集、風姿花伝、去来抄の例など)、「疎略ではない、いい加減には思わない」と誠意のあるところを示したり(謡曲、天草本平家物語、男色大鑑などの例)している。よって、オロソカはIVの意味に属することが明白である。

ところで、このIVは下に必ずしも打ち消しの語を伴わなくても、やはり「いい加減な、なおざりな、疎略な」の意味で盛んに使用されている。『古今和歌集』の仮名序の例から見ることによよう。

○かづらきのおほきみをみちのおくへ遣はしたりけるに、国のつかさ、事おろそかなりとて饗応(まうけ)などしたりけれど、すさまじかりければ、采女なりける女の土器(かはらけ)とりてよめるなり。

(古今和歌集・仮名序)

この部分は、歌の父母のように言われた『万葉集』三八〇七番の「安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心をわが思はなくに」という歌について、その成立事情を述べたところである。「かづらきのおほきみ」は橘諸兄である



うと言われているが、その葛城王が「みちのおく」（東北地方）に派遣された時に、「国のつかさ」、つまりその地方の役人の接待がいい加減だと言つて、「まうけ」（宴席）の用意があつたのに、ご機嫌が悪かつたので、采女であつた一女性が「かはらけ」（杯）をとつてお酒をすすめ詠んだ歌がこの「安積山・・・」であつたと言ふ。要するに、ここのおロソカは接待という抽象的な事柄に対して、それが「いい加減である、なおざりで誠意がこもつていない」と慨嘆しているので、問題なくIVの意味になる。

このように、打ち消しの語が下に来なくても、「いい加減な、なおざりな、疎略な」などの意味になるものは非常に用例数が多い。

左に大まかにその対象物によつて分類し、用例を掲げて行くことにしよう。まず、心や考え方・理解力などが表面的でいい加減な場合に用いられるオロソカがある。

○婆沙俱舍本国已二有（リ）、恨（ム）ラクハ其ノ理  
疎二言（コトハ）淺（シ）。

（大慈恩寺三藏法師伝・卷二）

○「老いたる者はすゞろに涙もろにある物ぞ」とおろそかにうち思ふなりけり。  
（源氏物語・東屋）

○踊躍（ゆやく）歡喜ノコ、ロオロソカニサフラフコト、マタイソキ淨土ヘマヒリタキコ、ロノサフラハヌハ・・・  
（歎異抄）

○信心ノオロソカナル故也。

（沙石集・卷二）

○老いぬる人は精神おとろへ淡くおろそかにして感じうごく所なし。  
（徒然草・百七十二段）

○何サマ功名ヲ立ント思タ心モ疎ナルソ。

（中華若木詩抄・上）

○今度討たれさせられた人々の北の方いづれかをろそかなことがござらうぞ。（天草本平家物語・巻四）

○句を聞事のおろそかに侍るゆへ也。  
（去来抄）

さらに、怠けて公的な仕事をいい加減にするような時にもオロソカという形容動詞が用いられる。

○「内藏寮・穀倉院など、公事に仕うまつれる、おろそかなる事もぞ。  
（源氏物語・桐壺）

○公事を、ろそかにし狩をのみせはこそは罪はあらめ。

（大鏡・道長）

○武家の目びきにてのみおほやけさまの事はよろづおろそかにぞしける。  
（増鏡・卷十八）

又、当然努力しなくてはいけない修行や稽古などをな  
おざりにして、不十分で誠意が感じられない場合には、  
まさにこのオロソカという言葉がふさわしく、特に仏教  
関係の書物ではその例が多い。

○「玄装業行空（シ）ク疎ニシテ謬（チ）テ緇侶ニ參  
シテ・・・」（大慈恩寺三藏法師伝・巻六）

○これ稽古のおろそかなるなり。（正法眼藏・佛性）

○これは時人の行持おろそかにして仏道の通達をわす  
れたるがごとくなるをいましむるにいたりといへど  
も・・・（正法眼藏・行持上）

○修行ノオロソカナルヲイマシメ給テ・・・（沙石集・巻六）

○我風体の形木（かたぎ）の疎かならむはことにこと  
に能の命あるべからず。（風姿花伝）

○かやうの習道疎かならば道も絶えぬべきかと芸心の  
及ぶ所を大かた申すのみなり。（至花道）

その他、次のような例も「いい加減な、なおざりな、  
疎略な」と訳せるオロソカである。

○「なめきつみぞはからるゝ。をろそかなるつみぞれ

うぜらるゝ。（宇津保物語・藤はらの君）

○みかどつかさなどやうのものにやあらん、おろそか  
にさうぞきけさうじつゝおどろの釵子（かんざし）  
おほやけおほやけしきさまして寢殿のひんがしの渡  
殿の戸口まで隙もなくおしこみてゐたれば・・・（紫式部日記）

○ことのおろそかなるをかへりみす後のあさけりをは  
つといへとも・・・（菟玖波集・序）入注・6V

○「二ツ具セン事ナヲカタクハ、セメテ慈悲ハオロソ  
カナリト毛質直ナラント思へ。（十訓抄・上・六）  
○葛城の大君、勅に従ひ陸奥の忍ぶもちずり誰も皆こ  
ともおろそかなりとて設けなどしたりけれど・・・（謡曲・采女）

○古點ニハアワヌソ、アフヲロソカニセウ人ハイヲク  
ウト云時ハ毛ト同物ソ。（毛詩抄）

○おろそかに我が身ひとつを祈るかな神のめぐみは人  
をわかじを（難波捨草・上・神祇）

右に挙げたものは、とりわけ具体的にはこれと指し示  
しているわけではないが、概念的な「こと」をオロソカ  
の対象としたり（菟玖波集、新撰菟玖波集、謡曲など）、  
装束のつけ方について粗略だと述べたり（紫式部日記）、

「罪」や「慈悲」「祈り方」などについてオロソカを用いたり(宇津保物語、十訓抄、難波捨草)など、きわめてその対象はバラエティーに富んでいる。

尚、最後に挙げた『難波捨草』という書物は、貞享五(一六八八)年に成立した私撰の歌集で、元禄期の地下派(じげは)歌人六十六名の歌、八百余首を集めたものという。実は、オロソカの例が極端に少ないことは先述したが、特に歌に使われたものは、ほとんど例がなく、『国歌大観』を調べた結果、やつとこの一首が見つかったという次第である。『難波捨草』など、まずお目にかかるらない名前ではあるが、オロソカの歌の例が載っている貴重な作品として、あえて例示しておいた。

以上、IVに属する「いい加減な、なおざりな、疎略な」の意味を有するオロソカについて、打ち消しを下に伴うものとそうでないものに大別し、各々その例を掲げて来たが、要するに、この種のものがオロソカの中で、圧倒的多数を占めていることは、否めない事実と言えよう。

さて、最後にもう一つ、オロソカの意味群の中に、今までとは違ったものが出て来るので、それについて述べて行くことにする。

初めに『宇治拾遺物語』の例からながめてみることにしよう。

○前生の運おろそかにして身に過たるは利生にあづからず。  
(宇治拾遺物語・四ノ一二)

右の前半部は「前世の因縁によつて定められた運が悪くて」と訳せるので、オロソカは「よくない」とか「すぐれない」の義になり、これまでのI、IVとは又趣を異にする。発生的に見ると、IVの「いい加減な、なおざりな、疎略な」が結局は不十分で不足気味なところから、「劣る」とか「つたない」、そして「すぐれない」あるいは「よくない」と変わつて行つたものであろう。量的には余り多くないので、全用例を左に掲げてみることにしたい。

○をろそかなるあちはひ、をちふれたるころもにはしんいの思ひあさからず。  
(閑居友・上)  
○供養まことならざれば功德おろそかなり。

(正法眼藏・供養諸佛)

○在家たとひ随分の善根功德あれども身心の善根功德おろそかなり。  
(正法眼藏・三十七品菩提分法)

○下地疎かなれば許す事かなはず。  
(花鏡)

○そのゆゑは疎かなるを許せば許す位は高上なり。

(花鏡)

○もし、なをも芸力(げいりき)疎かにてこの用風生  
ぜずとも、二曲・三体だに極まりたらば、上果の為  
手にてあるべし。(至花道)

○これなほもたしなみの不及にして疎かなるゆへかと  
思ふところに同じ上手、同じ芸風をなす当座当座に  
も、などやらん昨日は出で来、今日は出で来ぬ見風  
あり。(拾玉得花)

○年ヨリタレハ弥々疎カニナルソ。

(中華若木詩抄・上)

○近日ハ功名ノ念モ疎カナリト云ナレハ・・・

(中華若木詩抄・上)

○何サマ功名ヲ立ント思タ心モ疎ニナルソ。

(中華若木詩抄・上)

右のうち『閑居友』の例は、「あちはひ」つまり「味」  
に対して、オロソカを連体修飾語として用いている。

「味」が「すぐれない」とか「よくない」の意である  
から、つまりは「まずい味」ということになろう。

『正法眼藏』の二例は、「功德」についてオロソカだ  
と述べている。これらはIVの意味にとれなくもないが、  
やはり「不十分だ」とか「劣る」の訳の方がふさわしい

と思われる。

『花鏡』『至花道』『拾玉得花』はいずれも世阿弥の  
著した作品であるが、このオロソカは「素質」だとか  
「芸力」に対して使われ、「不十分ですぐれていない」  
と解釈する事が出来る。オロソカの対象が「稽古」もし  
くは「修行」であれば、努力の足りなさを指摘し、「い  
い加減な、なおざりな、疎略な」と訳した方がびつたり  
するが、「素質」や「芸力」は生来備わっているものな  
ので、やはりオロソカは「劣る、よくない、すぐれない」  
と訳した方が妥当であろう。

『中華若木詩抄』の三例のうち、初めに記した一例は  
漢詩「才本無多老更疎」の説明文で、「才能が元々あつ  
たわけではないのに年をとってますます不足して来た」  
ことを述べている。よって、オロソカは、明らかに「劣  
る」とか「すぐれない」のVの意味になる。

残った二例は「老去功名意轉疎」という詩句を説いた  
部分に出て来るが、漢詩そのものが「老人になると、功  
を立て名を上げようとする思いもなんとなく薄れて来る」  
と解釈出来るので、オロソカは、これ又、Vの「劣る、  
よくない、すぐれない」の意となることが明白である。

以上、Vのオロソカはその対象がすべて抽象的、精神  
的なものにしほられ、又、時代的には、中世に入ってから

ら出て来たものであることに注目したい。

さて、これまで形容動詞オロソカについて意味分類をし、大きく五つに分けて見て来たが、その使用場所についてはほとんど言及しなかった。しかし、右に掲げて来た例文を見れば明らかのように、オロソカは会話文にも地の文にも特別な制限を受けることなく自由に使われている。ただ、先にも述べたように、歌にはまず用いられなかったようで、『国歌大観』の索引を見る限り、わずかに一例出て来ただけであった。

それではここで、分類した五つの意味をまとめの意味で並べてみることにしたい。

- I 透き間が多い、まはらな
- II 簡素な、粗末な、みすぼらしい
- III そっけない、冷淡な、よそよそしい
- IV いい加減な、なおざりな、疎略な
- V 劣る、よくない、すぐれない

右の五つのうち、前号まで取り挙げて来た形容動詞オロカと同意のものは、IIIおよびIVになる。△注7▽  
とすると、これらの意味を表す場合、オロカとオロソ

カは全く任意に用いられていたのであろうか。

それとも両語の間には何らかの使用上の差異が存していたのであろうか。つまり、オロカとオロソカを、状況・人物・場所・時間などによって使い分けていたのか、あるいは時代もしくは作品のジャンルによる区別をしていたのかなどについて、引き続き調査を試みることにしたい。が、今回は、何分にも紙数をたいぶ重ねたので、これら二語の比較考察については、次号に回すことにし、大方のご叱正を仰ぎつつ、この辺で筆をおくことにする。最後にオロソカの意味別用例数を、作品数は少ないが参考までに掲げておくことにしたい。尚、作品はジャンルに関係なく、ほぼ成立年代順に並べた。△注8▽

古今和歌集	日本霊異記	日本書紀	作品名
	一		I
		一	II
		一	III
一			IV
			V
一	一	二	計

宇治拾遺	発心集	方丈記	三藏法師伝	大鏡	紫式部日記	源氏物語	宇津保物語	三宝絵詞	竹取物語
						一			
		一				四			
	一					一	五	一	一
			二	一	一	三	一		
一									
一	一	一	二	一	一	九	六	一	一

菟玖波集	足利法華經	徒然草	沙石集	唐物語	十訓抄	正法眼藏	閑居友	歎異抄	平家物語
	二								
		二				二			一
				一					
一		一	八		一	五		一	一
						二	一		
一	二	三	八	一	一	九	一	一	二

西鶴	伊曾保物語	天草本平家	毛詩抄	中華若木抄	新撰兔玖波	史記抄	世阿弥伝書	謡曲	増鏡
				三					
		一							
二	二								
一		五	一		一	一	六	二	一
				三			四		
三	二	六	一	六	一	一	一〇	二	一

計	秋の夜評語	三冊子	近松	去来抄	難波捨草
七					
一二					
一五					
五四	一	三	二	二	一
一一					
九九	一	三	二	二	一

△注1▽ 『学習院大学上代文学研究』第十八号および第十七号

△注2▽ 日本古典文学大系本（岩波書店発行）『日本靈異記』解説九ページ

△注3▽ これは、先に挙げた『日本靈異記』の例と同じもので、法華経の中の一文に当たる。

△注4▽

「疎」と「疎」は偏が違っているが、『正字通』では「疎、疎字の譌」と説明している。この「疎」の誤字が「疎」ということになる。尚、ついでにいえば、「疎」は「疏」の俗字である旨、『廣韻』に載っている。よって、本稿では底本の表記に従い「疎」と「疎」を同様に取り扱った。

△注5▽

日本古典文学大系本『日本書紀 下』三七二ページ、頭注九

△注6▽

この例と全く同じものが『新撰菟玖波集』の序にも載っている。

△注7▽

『漢和辞典』で「疏」の項を調べてみると、『呂覽・辯土』の「注」に「疏、希也」とあるのがIに、又、「詩・大雅」の「箋」に「疏、羸也」とあるのがIIに相当すると思われる。その他、「楚辞」にはIIIと同義の「疏、遠也」という「注」があり、IVとVについてもそれぞれ漢書での例が見い出される。

尚、古辞書の『新撰字鏡』『類聚名義抄』では、「飯」「疎」「稀」「簡」な

△注8▽

どの漢字にオロソカナリの訓がつけられている。

今回の調査に当たり参考にした作品の底本には、左記のものを除いて、岩波書店発行の日本古典文学大系本を用いた。

○三宝絵詞―『三宝絵詞自立語索引』、馬

淵和夫、笠間書院、昭和六十年六月三十日

○宇津保物語―『宇津保物語 本文と索引』

笹淵友一、笠間書院、昭和四十八年三月三十一日

○三藏法師伝―『大慈恩寺三藏法師傳古點

の國語学的研究』、築島裕、東京大学出版会、昭和四十二年

○発心集―『発心集 本文・自立語索引』、

高尾稔・長嶋正久編、清文堂、昭和六十年三月

○歎異抄―『歎異抄 本文と索引』、山田

巖・木村晟、新典社、昭和六十年二月十五日



○閑居友―『閑居友 本文及び総索引』、  
峰岸明、笠間書院、昭和四十九  
年

○正法眼藏―『修訂正法眼藏要語索引上』

加藤宗厚、名著普及会、一九八  
七年九月

○十訓抄―『十訓抄 本文と索引』、泉基

博、笠間書院、昭和五十一年十  
一月二十日

○唐物語―『唐物語 校本及び総索引』、

池田利夫、笠間書院、昭和四十  
八年

○沙石集―『寛永十年古活字本沙石集』、

深井一郎、勉誠社、昭和五十五  
年三月

○足利法華経―『足利本仮名書き法華経』

中田祝夫、勉誠社、昭和五十二  
年三月

○菟玖波集―『菟玖波集の研究』、金子金

治郎、風間書房、昭和四十年十  
二月

○謡曲―『謡曲二百五十番索引』、大谷

篤藏、赤尾照文堂、昭和五十三  
年四月

○世阿弥伝書―『世阿弥傳書用語索引』、

中村格、笠間書院、昭和六十年  
四月

○史記抄―『抄物資料集成』別巻索引篇、

岡見正雄・大塚光信編、清文堂、  
一九七六年十二月

○新撰菟玖波集―『新撰菟玖波集総索引』、

山根清隆、和泉書院、一九九一  
年五月

○中華若木抄―『中華若木詩抄文節索引』、

上々下、深野浩史、笠間書院、  
昭和五十八年、平成元年

○毛詩抄―『史記抄』に同じ

○天草本平家―『天草版平家物語対照本文  
及び総索引』、江口正弘、明治  
書院、昭和六十一年十一月

○西鶴―『近世文学総索引 井原西鶴』、

近世文学総索引編纂委員会編、  
教育社、一九八八年一月

○去来抄―『校本芭蕉全集』七卷俳論編、

角川書店

○近松一 『近世文学総索引 近松門左衛門』

近世文学総索引編纂委員会編

教育社、一九八六年一月

○三冊子 『去来抄』に同じ

○秋の夜評語 『去来抄』に同じ